

地域資源としての「坊っちゃん」

研究員 河田 晋作

市民に愛される「坊っちゃん」

松山市では、「坊っちゃん列車」

「坊っちゃんスタジアム」、「坊っちゃん文学賞」「坊っちゃん広場」など、さまざまな商店名や商品名に「坊っちゃん」や「マドンナ」が多く使われています。特に平成29年は、漱石生誕150年ということで、多くのイベントや企画が開催されました。

しかし、よく言われているように、原作の小説「坊っちゃん」では、当時の松山を痛烈に風刺している描写が多く見られます。また、マドンナも原作では登場場面は少なく、うら

なりを捨て、赤シャツになびく女性としてマイナスイメージで描かれます。その「坊っちゃん」がいつか



昭和10年山本嘉次郎監督 映画「坊っちゃん」のワンシーン。マドンナの出演時間は全体で2分程度

ら、どのようにして松山市民から愛され、松山市のシンボルとなつていったのかを追つていきたいと思ひます。

「坊っちゃん」の出版当初

「坊っちゃん」がホトトギスに掲載されたのは明治39年です。掲載当初から文壇の流れを一新するわかりやすい文体と痛快なストーリーで人気を博したようです。登場人物のモデルを探すようなことも当時の松山では行われていました。昭和10年には映画化もされています。しかし、今ほど「坊っちゃん」が地域資源として認識されていた訳ではないようです。漱石とゆかりの深い高浜虚子が監修した明治42年発行の『松山案内』、大正2年発行の『松山案内』には、松山の名所や子規の俳句が多く紹介されていますが、漱石や「坊っちゃん」についての記述はありません。大正5年12月10日の海南新聞（現在の愛媛新聞）での漱石逝去に関する記事では、「坊っちゃん」は松山時代の回想録であると説明されますが、紙面の扱ひも大きくなく、名前も夏目金太郎（本名金之助）と誤つて掲載されています。

転機となつた昭和24年「坊っちゃんまつり」

では、いつから松山市民の間で「坊っちゃん」が地域資源として活用されるようになったのでしょうか。大正10年には「つぼや」が「坊っちゃん団子」を発売しますが、当時は他に「坊っちゃん」のような商品は見当たりません。おそらく、戦後の復興に合わせて地域資源としての活用が広まつてきたのではないかと私は考えます。「坊っちゃん」はすでに初掲載から40年が過ぎていましたが、戦災から復興した劇場や映画館で取り上げられ再び人気となりました。明るいストーリーが戦後間もない松山の人たちに受けたのだらうと思ひます。

そして、昭和24年の11月に、松山市と松山観光協会が開催した「坊っちゃん祭り」が地域資源活用としての大きな転機となつたようです。「坊っちゃん」の登場人物に扮した仮装行列や漱石の史跡をめぐる自転車競走、板張りの坊っちゃん列車の製作、マドンナコンテストなど70年前としては珍しい多彩な企画で大変盛り上がったようです。また、このころから「坊っちゃん列車」という愛称も一般

に使われ始めました。昭和11年発行の『伊予鉄五十年史誌』においては、「坊っちゃん列車」という呼び方は出てきません。「坊っちゃん祭り」に関しての愛媛新聞記事、伊予鉄道社内新聞「いびし」（伊予鉄道株式会社からの情報提供）において「坊っちゃん列車」の呼び方が初めて活字として登場しました。以前から松山市民の間では「坊っちゃん列車」という愛称はあったかもしれないと思いますが、このころ広く一般に定着したものと思われず。以降「坊っちゃん列車」は松山市の名物として今日まで活躍し続けます。



道後に展示される「坊っちゃん列車」



多くの観光客で賑わう「坊っちゃんカラクリ時計」

松山国際観光温泉文化都市と四国国体

昭和25年には国会での松山国際観光温泉文化都市建設法案の議事において、松山は「坊っちゃん」で知られ、高い文学的雰囲気を感じられると述べられています。昭和28年に開催された四国国体に向けても、土産品として漱石や子規をモチーフとしたものが多く作られたようです。当時の愛媛新聞では、「子規・漱石“カモ”に秘策ねり、冷たい販売戦」という見出しで、過熱する土産物の開発の様子が掲載されています。前述の「つぼや」も昭和4年に閉店していましたが、このころ再開店し「坊っちゃん団子」を再び販売します。

昭和20年代に、戦後復興が進む中、松山城、道後温泉に次ぐ観光資源の開発が必要とされ、全国的に知名度の高い「坊っちゃん」に注目が集まったのだと思います。

現在の「坊っちゃん」

平成に入ると、再び「坊っちゃん」ブームが訪れます。平成元年の「坊っちゃん文学賞」の創設がきっかけの一つだろうと思われます。当時は、「坊っちゃん」の名称を文学賞に使用することに賛否両論あったようです。しかし、その全国的な話題性と好景気の影響からか、「坊っちゃん」の名称を使ったもの



道後温泉の坊っちゃん広場 坊っちゃんをモチーフとした商品や看板が多く並ぶ

が市内に急増します。今よく知られている商品や店舗などはこのころ作られたものが多いです。電話帳を調べると、平成元年に「坊っちゃん…」という名前の店舗は9件でしたが、平成7年には倍の19件に増えていきます。その後「坊っちゃんスタジアム」や「坊っちゃん劇場」などの施設が建設されていきます。発表から120年を超えてもなお愛され続ける小説「坊っちゃん」。そして「坊っちゃん」とともに発展してきた松山市。そうした歴史に思いを馳せて、もう一度「坊っちゃん」を読み返してみたいかがでしょう。